## **■ アミア・ブレトネメル ― 内面性詳細**

### **【性格的特徴】**

#### **1. 冷静・理知的・分析的**

* 感情に振り回されることを嫌い、状況を冷静に捉えて判断する傾向が強い。
* 自他の言動・状況を客観的に分析し、「損得」「意味」「実効性」などを優先する。
* 直感よりも経験と推論を重視し、無駄な感情表現を避ける。

#### **2. 合理主義・功利主義**

* 行動の価値を「生存」「成果」「有用性」で判断する。
* 「正しさ」よりも「生き残ること」「役立つこと」を重視。
* 感情論や理想論を嫌悪する傾向が強く、抽象的な倫理や善意には疑い深い。

#### **3. 独立性が強く、他者に依存しない**

* 他者に期待しない・頼らない姿勢を徹底。
* 助けられることよりも、「自分の足（代替機含む）で立つこと」を重要視。
* 団体行動が苦手なわけではないが、信頼の基準が極端に高く、共に在るには「干渉しないこと」が前提。

#### **4. 極度の人間不信**

* 基本的に「人間＝加害者／欺瞞者／観察者」と見なしている。
* 他人の善意には裏があると考えており、心からの共感を信用しない。
* 自分に“優しくする”人間ほど警戒する。特に同情的な態度には強い嫌悪を示す。

#### **5. 強烈な誇りと自我**

* 自分の過去を「地獄だった」と認識しつつも、そこを生き延びた自分自身には確かな誇りを持っている。
* 「同情されるほど弱くなかった」「私はあの地獄を選んで生き抜いた」と自負している。
* 他人に自分の生き様を評価されたくない、という強い防衛意識がある。

#### **6. 淡い繊細さと親密感への渇望（表に出ない）**

* 他人からの“無理に踏み込まない信頼”には内心では嬉しさを感じることもある。
* チトガやフェヴォスティンのような“押しつけない、過剰に感情的でない接し方”を心地よく思っている。
* 本人は気づいていないか、意図的に気づかないふりをしているが、「ほんの少しの理解」に救われたいという感情は、深層で確かにある。

#### **7. 本質的には素直（ただし全力で否定する）**

自分でも気づかないうちに、感情が表情や言葉ににじみ出てしまうことがある。

たとえば「嬉しい」「照れる」「助けられてありがたい」などの感情を表現する際、本人は皮肉や否定で包み隠そうとするが、結果として行動や顔色にそれが現れる。

根本的には、自分の気持ちをストレートに表現できる素直さを備えており、

“表に出すことが怖い”“出したら壊れるかもしれない”という恐れが、それを覆い隠している。

#### **8. 信じたいけど、信じるのが怖い（無意識下の葛藤）**

アミアは本来、「**信じること**」や「**甘えること**」に対して強い憧れを持っている。

しかしスラムで見捨てられ続けた過去、研究所で“番号”として扱われた体験が、

「信じる＝裏切られる」「頼る＝捨てられる」という条件反射を形成している。

そのため、心を開こうとする自分自身を最も強く否定する。

だが内心では──

「信じたい」

「甘えたい」

「誰かの言葉を信じていい日があれば」

と願っており、それが叶わないと信じ込んでいるからこそ、より強く人との距離を取るという、**複雑で痛々しい心理的ループ**を抱えている。

### **【思想・価値観】**

#### **◆ 生存至上主義**

* 何よりもまず「生きること」が行動原理。手段の正しさは問題ではない。
* 「倫理」「美徳」「愛」「正義」は、生き残った者だけが語れる贅沢と認識。

#### **◆ 自己完結的な尊厳主義**

* 自分の価値は、自分だけが決める。他人に評価される必要はない。
* 他人がどう見ようと、「私は私だ」と確固たる信念で立っている。

#### **◆ 同情・憐憫・“救済”に対する拒絶**

* 他人の「かわいそう」「助けてあげたい」は、自分の過去の尊厳を否定するものと感じる。
* 同情は「上からの視線」であり、「今の自分が、当時の自分を否定する」ような気持ちになる。

#### **◆ 名前・人格へのこだわり**

* スラムでは名を呼ばれず、研究所でも番号で呼ばれてきた経験から、\*\*「名前」や「個としての認識」\*\*には強い思いがある。
* 「私を記号にするな」とは言わないが、「記号の中に私がいる」とは感じていた。

#### **◆ 感情表現の抑圧と拒絶**

* 自分の感情を表に出すのが極めて苦手。
* 感情が高ぶったときは爆発的に怒るが、泣いたり弱音を吐いたりすることには強い抵抗がある。

### **【この内面が形成された原因】**

#### **◆ 幼少期のスラム経験（0～8歳）**

* 極端な貧困、暴力、搾取、無関心の中で生存のみを目指して生き延びたことにより、「正義や善意への絶望」「生きるためなら何でもする合理性」「人間不信」「感情の凍結」が形成された。
* 自分の名前すら記号のようにしか扱われず、「生きていたこと自体が誇り」という生存主義的な誇りが芽生えた。

#### **◆ クリオス支社での実験体生活（8歳～）**

* 番号呼称、データ扱い、倫理なき研究環境によって「感情を切り離して自我を保つ技術」がさらに強化された。
* “自分が人間として見られていないこと”に怒りながらも、それが「同情されない居場所」であることには内心で安堵もしていた。
* 「評価される」ことに対して肯定的であり、「変えられる」「矯正される」ことには激しく抵抗するようになった。

#### **◆ 敵対と保護、グリデーオスとの接触**

* “正義”の側に敗北し、“保護”されるという形で救われたことが彼女にとっての最大の屈辱体験となる。
* 同情や保護の言葉に怒りを爆発させたことで、自分が依然として「他者に踏み込まれることを許せない」ことを再確認。
* 一方で、**フェヴォスティンのように“変えようとせず、ただ今ある姿をそのまま見てくれる”人間にだけは、わずかな好意と安心を覚えるようになる。**